

# 筑波大学附属視覚特別支援学校見学

2007/08/31

## 趣旨

附属視覚特別支援学校主催の第4回学校公開に参加。プロジェクトメンバーが普段経験することのない盲学校の生活を見学し、今後のプロジェクト活動については東海大学における「障がい学生支援室」を立ち上げる際の参考として。またプロジェクトメンバーの意識に変化をもたらすものとして。

## 日時

2007年6月14日(木)

## 場所

筑波大学附属視覚特別支援学校

## 参加者

プロジェクトメンバー(5名)

## 内容

8時半から12時半まで、幼稚部・小学部・中等部・高等部などの授業を見学。授業は中等部から、点字使用者と墨字使用者で別れて行われる。授業内容次第では同一クラス。ホームルームは一緒に行く。

- **ホームルーム**

黒板には書かない。机の位置はまばら。**通常サイズのプリント**が配られていた。

- **物理**

やはり口頭によって授業が進められていた。黒板には大きな字で図式が書かれていた。弱視生徒はノートに顔を近づけて読み、盲生徒は点字版を使用していた。盲生徒の点字を打つスピードは慣れない目から見ると、尋常な速さではなかった。

- **ADL(Activity of Daily Life)**

自立活動のことである。これは盲学校独特の授業らしい。一般的に盲学生は見て覚えることができないため、**経験させて覚えることが大事**であるという。そのための授業である。

この日は個別で料理指導を行っていた。そのなかで味噌汁を作ることになり、どのくらいの分量でどのような味になるのか、味噌は高温で溶かすなどを具体的に経験させて覚えさせる指導を行っていた。

## • 体育

体育館においてフロアバレーを行っていた。通常のバレーボールとは違い、**ネットの下にボールを通す**形で行われる。前衛は盲の生徒、後衛は弱視の生徒と固定され、後衛が前衛を指示する形で行われる。

また前衛は公平を期するために、**全員アイマスク**を着用していた。想像以上にプレイが激しく、早かった。特に前衛の、後衛からの指示に対する反応とボールを感知してから打つまでのスピードはすばらしかった。

また、後衛による指示も「～時の方向」などと言う言い方をし、とても的確であった。

ひとつのスポーツとして完成度が高く、面白いと感じ、ぜひ実践してみたいと思った。

## • 情報

パソコンで音声読み上げソフトの使い方の練習を行っていた。漢字、ひらがな、カタカナ、半角などの書式で、「鯖」、「さば」、「サバ」、「サバ」、などの言葉の**音声読み上げ時による音質の違い**などを聞き比べていた。

## • 理科

塩酸を使った実験を行っていた。塩酸の入ったビーカーに手で卵を入れる。すると、卵が塩酸で溶けて泡が発生し、同時に「シュワシュワ」という音がした。

その後泡は膨らみ続けもっこりとしたものになり、最終的には触れて判る状態となった。生徒はそれを触れて確かめ、驚いていた。その後、茹で卵化した卵を触ったりなどもした。卵はゴムのような弾力性を持っており、触ってみると変化がすぐに分かった。実験はこのように見えなくても分かるということに基づいて行われていた。

また実験中に教師からの指示はあるものの、実際に自分の手でビーカーに卵を入れたり、ビーカーから取り出したりしたのは全て生徒たち自身であった。

他にも細胞分裂の過程をカードに突起した線で表し、細胞分裂の過程を順番通りに並ばせるなども行っていた。このように具体的なものを使う授業が行われていた。

- **図書館**

図書館は幼稚部・小等部用と中等部・高等部用の二つがあった。内容としては点字図書、墨字図書、朗読テープがあった。また墨字図書には本を探す時の指標になるように、**タイトルには点字が**ふられていた。

- **その他**

廊下の風景において、生徒たちは壁伝いに歩く者が多かった。また弱視の生徒と盲の生徒のペアなどで手引きして移動する様子が数多く見られた。見学者にもそのような組み合わせが多く、どうやらこの世界では当たり前前のようなようである。

歩いていて、互いにぶつかりそうになっても直前で回避していた。またもしぶつかったとしても、一言「ごめんなさい」と言うだけで終わっていた。傍目から見ていると激しくぶつかっている印象を受けたが、おそらくそれも日常の一部なのであろうと思われた。

またあいさつはしっかり行われていたが、それは恐らく**自分の存在をアピールする意味も含まれているのだらう**と感じた。何も言わずに廊下に立っているのは衝突は免れないであろう。実際、無言で立っていたところ一度衝突しかけた。

またチャイムが鳴ると、遅刻しそうな生徒はふつうに走って教室へ向かっていった。生徒たちが校内を移動する際は、白杖などは用いておらず、その代わりとしてか手を少し前にだして歩く者が多くいた。

上記のように、廊下の光景は大変不思議なものであった。

盲ろう生徒は指点字をコミュニケーションの主に行っているようだった。指点字とは、両手の指をそれぞれ3本ずつ併せて6本、点字の基礎の6単位として指に触れて伝えるものである。

点字を知る者にとっては比較的習得するのは容易である。彼は、眼鏡と補聴器を着用し、また**鈴をつけて手引きによって移動**していた。鈴は彼の存在を周りに知らせるためにつけられていた。

また点字のタイプライターを持ち歩いていた。授業中には彼が声を発することはなかった。

教師にもなにかしらの視覚障がいのあるであろう者は多数見られた。実際に数学や英語の教師などはそうであった。音声によって説明が比較的

容易な授業であれば、視覚障がいのある教師もたくさんいるようであった。

## 感想

個人的には全盲である東海大学の学生 2 名と接してきて、ある程度は盲文化に慣れてはいるとは思っていたが、やはり盲学校見学は衝撃だった。しかし、それは今まで疑問に思っていたいろいろなことの答えでもあった。例えば、移動の際はどのようにするのか？遅れそうな時は走るのか？などである。そんな疑問に対する答えが得られた。そういう意味でこの学校公開への参加はとても意義のあるものであった。

この見学を通して感じたことは、まず全てにおいて時間があるということ。見えないうちでも、適切なサポートさえあれば社会にあわせて生活できると考えていた。だが、時間という面だけで見れば、見える者に比べてたくさんの時間を使わなければならないのは事実である。その例としては墨字で 1 冊の本が点訳すると 50 冊以上になることなどからも分かると思う。それらをふまえて改めて時間が必要ということを感じ知らされた。

盲学校には盲だけでなく、弱視の生徒がたくさんいる。彼らは一見して弱視だとは分からない。見た目だけでは分からないのである。見た目だけでは、障がいの有無など分からない。そんな簡単に障がいというモノだけで人を分けられないように感じた。いろんな人がいて当たり前。全ての人が受け入れられる社会であるべきだと思う。そのためにも、まず機会や条件を等しくするための制度の確立が重要である。そういう意味でこのプロジェクト意義は重大であると感じた。

盲学校では生徒たちひとりひとりにあわせて見えなくても楽しめる教育が行われていた。実際に触って確認できる教材もたくさんあった。